23の講義内容　注釈書類の引用文献　―その４　記録類資料―

2007.11.29 更新

はじめに

―その１　■古記録資料の国語学的研究　堀畑正臣著―

本書の構成

序　章　古記録資料の国語学的研究の構想

第一部　古記録資料の語法

第一章　平安時代の古記録における「須（スベカラク～ベシ）」の語法

第二章　形式名詞「條（条）」をめぐって

第三章　「被成（ナサル）」の分布と展開

第四章　「（サ）セ＋ラル」（使役＋尊敬）から「（サ）セラル」（尊敬）へ

第五章　古記録語法の口頭語化をめぐって

第二部　古記録の文章と記録語

第一章　『小右記』の文飾　用語・用字・語法からみた個性的文体について

第二章　平安時代の古記録に使用された使役助字

第三章　古記録と唐代口語

第四章　古記録に見える「因縁」（婿・姻戚）をめぐって

第五章　「挙首（カウベヲコゾリテ）」「挙（アゲ）テ」と「挙（コゾリ）テ」

第六章　「候気色（ケシキヲウカガフ）」とその周辺

終　章　古記録資料に於ける国語学的研究の今後の課題

索　引

ISBN978-4-7924-1400-9 C3081（2007.2）A5 判　上製本　674 頁　本体 14,000 円

《内容解題》

新しい視点からの記録語の解明　　堀畑正臣氏『古記録資料の国語学的研究』

筑紫女学園大学教授・九州大学名誉教授　迫野虔徳

築島裕博士「変体漢文研究の構想」（東大人文科学科紀要一三　一九五七）で変体漢文研究の一環として記録語についての研究の構想が語られてから半世紀、近年ようやくその研究成果が著書のかたちで公刊されるようになってきた。峰岸明氏『平安時代古記録の国語学的研究』（一九八六）小山登久氏『平安時代公家日記の国語学的研究』（一九九六）遠藤好英氏『平安時代の記録語の文体史的研究』（二〇〇六）等々に今回堀畑氏の『古記録資料の国語学的研究』が新たに加えられることになった。古文書の研究の進展（辛島美絵氏『仮名文書の国語学的研究』（二〇〇三）三保忠夫氏『古文書の国語学的研究』（二〇〇四））と相俟ってこの遅れていた分野の研究が急に花開いてきたように見

える。

今回出版される堀畑氏の労作は、研究史的にみてもたいへん注目される。これまでの古記録語の研究は、和文や漢文訓読文にない記録語・記録体の独自のかたちを明らかにすることに努力を傾けてきた。また、その前に果たしておかなければならない漢字書きの本文をどう読み解くかということに力をさいてきたといってよい。堀畑氏は、記録資料の内部にだけ目を向けたこのような「静態的研究」だけでなく、その周辺資料にも積極的に目を向け、記録語との関連をさぐりながら広い視野のなかで記録のことばを考えるというダイナミックな方法を新たに取り入れた。

たとえば、「被成（ナサル）」や「（サ）セラル」（使役＋尊敬から全体で尊敬へ）などの敬語が記録語の中で生まれたことを多くの古記録資料の精査と和文などとの対比を通して明らかにする。そして、堀畑氏は、それだけにとどまらず、これらが記録語から出て、和漢混淆文の軍記物語や公家の説話類（古今著聞集など）などにも使用されるようになり、やがて広く拡散していくその後の展開もあわせて明らかにしている。漢字書きの記録語は、話し言葉とは遠い、書き言葉の最右翼にある資料という「常識」があったのではなかろうか。この記録語から生まれた語がのちの口頭言語の普通の敬語「ナサル」（「ナハル」）や「シャル」「サッシャル」へと連なるという指摘は、我々を思わず立ち止まらせる。堀畑氏は、「公的な会話」（改まった場面での口頭の言葉）という特別な会話の場を想定し、そのような場で、敬意の高いあらたまった新鮮な言い方として記録の敬語が取り入れられ、そこから次第に広がっていったのではないかという。

ジャンルの異なる他資料との幅広い対照という手法は、漢字書きの記録語のよみの確定にも生かされる。「候気色」は「ケシキヲウカガフ」と読むこと、「挙首」は「カウベヲコゾリテ」と読むか「アゲテ」と読むかなど、読みの決定に説話集や軍記物語、『**愚管抄**』など他資料が幅広く利用される。

このことは、読みの決定というだけでなく、記録語を多くの資料のなかで、どのような資料に近く、どのような資料には遠いかを定位することに他ならない。この作業は、新しい文章史の研究に展開していくであろうことを予感させるものでもある。記録資料は、漢字による日本語の表現様式をもつものとして、むしろ言語生活史的な側面からの関心を強く引く特殊な資料というところがあったが、本書によって、国語史の多くの一般文献のなかにはじめてひきずり出され、正当に評価される道を開いたと評してよいのではなかろうか。

―その２　■平安古記録文中的唐代口語疑問句

砂岡　和子　駒沢女子大学

《抄録》

本稿は日本の平安朝古記録に現れる疑問文のうち、漢語の口語要素を反映すると思われる文型と語彙を電算機のデータベース機能を用いて抽出し、古記録文中に中国近代漢語の一痕跡を探索せんと試みるものである。日本国語学の漢文訓読・訓点学の学術成果と伝統を未消化の内に、拙稿をしたためることの非難は覚悟ながら、中国語史の視点で日本漢文資料を調査した結果を提示したい。古記録文は西暦9世紀後半から10世紀にかけ、男性平安貴族によって記された勤務日記、儀典心得の類を指す。時は唐風文化の最盛期で、貴族たちはこぞって漢文体による文筆活動を行った。彼らの基礎教養は純漢文であるが、古記録は私家文書の性格を有し、中国漢文を模しつつ日本語文法と訓読漢語語彙が融合した文体で綴られた。日本国語学では、この種の文体を純漢文に対して変体漢文と称することもある。国内の研究は当然ながら、日本語史からみた研究が主で、漢語口語層に焦点をあてた先行論著は管見する限り見あたらない。従来国語学では、漢語の口語の範囲を、俗語や方言などに狭く限定して捕え

がちであるが、口語は日常の漢語にも常見するのであり、事実平安古記録文にも口語漢語の影響を発見できる。さてふりかえって、中国語学界をみると近年中国語史の研究が盛んになり、魏晋南北朝より唐、五代を頂点とする近代漢語の研究が活況を呈している。これは唐代原資料である膨大な敦煌文献の発見と、その整理解読作業の進展が大きな推進力となっている。日本でも、この唐代口語解明につき動かされるように、日本漢字資料中の漢語口語語彙研究が進み、『万葉集』『古事記』『日本書紀』中の中国語口語語彙が検証されつつある。拙稿は日本平安期における漢語口語資料を「口語疑問文」という角度から個別検証したものである。古記録文中の口語疑問句に焦点をあてた理由は次の2点にある。第一に近代漢語史において、唐代は新出の疑問文型ならびに語彙が際立った時期であること。第二に疑問句表現形式は、中国語と日本語で大いに異なるため、古記録文の漢語の影響を観察するのに有効な指標となりえるはずである。論題を唐代口語としたが、六朝期や晩唐後の五代を排除するものではない。六朝に芽生え、五代に至って成熟期を迎える中国近代漢語研究の確実な原資料は、質量とも敦煌資料の右にでるものは、現在まで見あたらない。従って口語研究は唐代をもって近代を代表させるのが一般的である。しかし結果からいうと、平安古記録文中の口語語彙および文型は、むしろ古代漢語から脱皮しつつある比較的保守的な近代口語層に属し、中唐から晩唐期の敦煌文学作品に顕著な新出口語は稀であった。よって正確には「平安古記録文中の近代前期漢語口語疑問句」とでも命題すべきところであるが、近代漢語という定義や時代区分を現段階で厳密にすることは難しい。そこで便宜的に近代漢語のピークを唐代で代表させ、題名とする。幸いにして平安古記録文の検索は、**東京大学史料編纂所が古文書データベース**のサービスを開始し、電算機による迅速大量の検索作業が可能となった。遠隔からもアクセスでき、語彙そのものの検索と統計は驚くほど簡便になった。しかし最も基本的な作業である、原資料の校勘作業に今回は手をつける余裕がなかった。加えて本稿で選

んだ検索キーワードが正鵠を射ているか、統計結果の意味分析、古記録文献資料間の言語の質差をどう観るかなど、今後検討補正しなければならない課題は多い。本稿は1997年9月10日より15日まで、中華人民共和国浙江省杭州市敦煌飯店で開かれた、**中国敦煌吐魯番学会**、杭州大学敦煌学センター共催の97年敦煌学討論会において口頭発表した論文に、加筆修正したものである。中国側の本討論会論文集は出版未定で、本学紀要に先に発表をお許しいただくことにした。中国発表時の論題は「**日本平安古記録文中的口語疑問句**」であるが、本紀要掲載に際し上記のように改めている。なお、中国での討論会参加にあたって、駒沢女子大学国際交流委員会の97年度国際交流費助成を得たことを感謝する。拙稿の執筆にあたり、古記録文の諸先行研究の所在と、東京大学資料編纂所検索サービスの情報を御教示賜った、本学日本文化学科倉本一宏助教授、ならびに杭州での上記討論会で発表の際、貴重な提言を頂戴した**鄭阿財台湾中正大学教授**、**顔廷亮甘粛省社会科学院研究所教授**、**黄征杭州大学敦煌研究中心教授**、**張金泉同古籍研究所教授**、ならびに討論会に同席された諸先生に紙面を拝借し深謝する次第である。

※ http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/syoho/19/saiho_KYOTOD~1.HTM

東京大学史料編纂所『平安遺文データベース』で「利養（リヤウ）」の語を検索するに、

1貞観十年一月二十三日「之労、受等分福利、仏言客僧有利養分別、請五百羅漢僧、不如僧次既収」〔156 書陵部所蔵文書 1/129〕

2寛和二年九月十五日「人共応垂其抜済、不為世間名聞利養而契、唯為菩提真善知識而契、」〔大日史1横川首楞厳院二十五三昧起請（大日本史料2編1冊 p.50）15/1〕

3元暦二年一月十九日「是非自身之望、又非為名聞利養、近者助支王法、慰万民之愁歎」〔既収 4892

神護寺文書 9/3786〕

4元暦二年一月十九日「末代悪世之僧徒、偏貪著名聞利養、故不顧仏法之道理、不用大師」〔既収 4892 神護寺文書 9/3786〕

右の四例を検索できる。また、『鎌倉遺文』にあっても十四例が検出でき、このうち「名聞利養」の語は五例、「求名聞求利養」の語が三例、「名聞モ利養モ」の対語一例、他には「觀音利養」の語が一例を見る。次に愈々、『古記録テキストデータベース』を以て検索するに、平安時代の平安時代の文献としては『貞信公記』『九暦』『小右記』『御堂関白記』『後二条師通記』『中右記』『殿暦』『小右記』、さらに鎌倉時代の『岡屋関白記』『猪隈関白記』『民経記』『建内記』『薩戒記』『上井覚兼日記』『上井覚兼日記』の室町時代まで何と用例無しなのである。この語が用いられた時代が平安後期から鎌倉時代の限られた文書類に見出されることもこれで明らかとなる。

この「利養」の語は、古辞書である観智院本『類聚名義抄』には未収載にあり、『色葉字類抄』（前田本）に、「利養僧侶分」〔平平〕〔上巻利部・畳字門74ウ⑤〕と見えている。そして、仏教説話集『今昔物語集』（一一二〇頃）巻十二・卅三に、「而ル間ニ、道心堅固ニ敖レバ、現世ノ名聞・利養ヲ永ク弃テ、偏ニ後世菩提ノ事ヲ思ケル間ニ、カク止事无キ學生ナル聞エ高ク成テ、召シ仕ハム為レド、強ニ辞シテ不出立ズシテ、思ハク、「我レ、此ノ山ヲ去テ多武ノ峯ト云フ所ニ行テ、篭居テ静ニ行テ、後世ヲ祈ト思テ、師ノ座主ニ暇ヲ請フニ、座主モ免サル、事无シ、傍ノ學生共モ強ニ制止スレ、思ヒ歎テ心ニ狂氣ヲ翔フ。」〔大系3 182⑪〕とあって、その大系本頭注で「財物を貪り私腹を肥やすこと。その主として僧侶の行為に係ることは、『色葉字類抄』に「僧侶分」と注することによっても知られる。本册では多く「名聞」と熟して用いられる」と論述指摘するところである。実際に、古記録『平安遺文』四例中三例に「名聞利養」の例を見出す。これを古往來である『東山往來』

の上巻には、次の一例が用いられている。

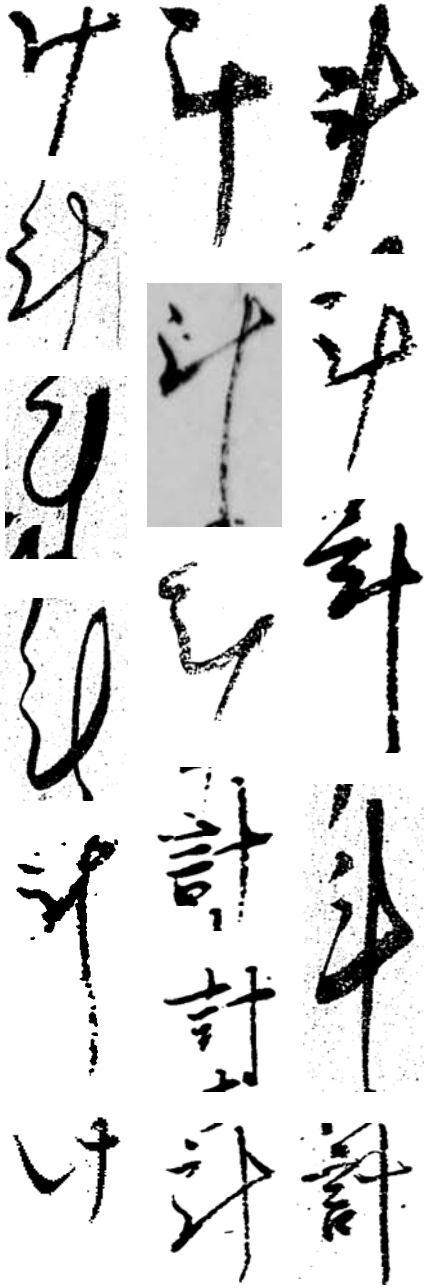
抑地心經者日域凶人為嗜佛教ヲ為求利養ヲ自偽作也〔高上巻10ウ③〕

抑地心經者。日域ノ凶人。為ニ嗜佛教ヲ。為ニ求ニ利養ヲ。自偽作也。〔宮上巻9オ⑥〕

※高野山本図絵

東京大学史料編纂所「電子くずし字辞典」〔http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller〕文字検索利用の実際

識番［149,024,030］【計】字を検索してみたものである。



1「飛鳥井雅康消息、十二月四日」2「長谷場文書、（年未詳）十月十七日」3「中川四郎氏所蔵文書、（年未詳）一月十三日」4「佐藤文書、（永禄十一年カ）七月二十三日」5「中川四郎氏所蔵文書、文明元年十月十三日」6「聖守書状、（年未詳九月二十日）」7「上井覚兼日記：伊勢守日記、天正十年十一月十一日」8「長谷場文書、（年月日未詳）」9「堀河基俊遺領裁許状、貞和四年十二月七日」10「北野宮寺政所下文、貞永元年四月二十五日」11「中川四郎氏所蔵文書、文明元年十二月二十四日」12「長谷場文書、（年未詳）十月十七日」13「佐藤文書、（年未詳九月二十日）」14「佐藤文書、（年未詳）四月十五日」15「佐藤文書、（年未詳）四月十五日」16「園城寺文書、天正元年八月五日」17「草露貫珠」を含む五十三字が確認できる。

ここで、取り扱った古記録・古文書類における「計」の文字標記字だが、言扁（ごんべん）のくずし様が後に「斗」文字と表記されていく文字であるが、その傾向が見られたりする。また、現在展示中の京都・大谷大学博物館（ハウ）蔵『三國祖師傳』一巻〔平安時代、久安六年（一一五〇）〕の「行基大僧正賛」にみえる「津設（マウ十）雀-舫（フネ）路架（カス）ニ虹橋ニ」の「設」字の傍訓には、「マウ十」のようにカタカナ「ケ」の假名表記を「計」の旁を以て表記した例を見出す。ここでは漢字「計」の表記からひらがな「け」への移行を知るだけだが、実際の語用例に基づきながら、湛然に読み解いていくことを学ぶことができよう。次にこの方法で、他文字の検索を試みてはいかがだろうか。